

## 阪神間の風土と植物（伊丹市園芸協会・伊丹市植木組合主催講演会）

吉田 成俊

風土：自然、社会、文化などの環境の総体。地域を特徴づけるとともに、人間の生活や精神に影響を与える存在。

### I. 阪神間の姿

#### 1. 阪神間の概要

○阪神間とは：大阪と神戸の間

・阪神7市1町：尼崎、西宮、芦屋、伊丹、宝塚、川西、三田、猪名川

・狭い定義：20世紀前半、住吉・芦屋周辺に財界人や文化人が住んだ高級住宅街

○阪神間の特性：①三大都市圏 ②阪神工業地帯 ③山・海・農地に近い住宅地

#### 2. 阪神間の規模と地理的特徴（H29）

○面積と人口

・阪神7市1町：650 k m<sup>2</sup>（県の8%） ↔ 神戸市：557 k m<sup>2</sup>、大阪市：225 k m<sup>2</sup>

・阪神7市1町：175万人（県の32%） ↔ 神戸市：153万人、大阪市：271万人

○昼間人口率

・尼崎市：96%、西宮市：90%、伊丹市：91% ↔ 神戸市：102%、大阪市：132%

### II. 阪神間の自然環境

#### 1. 太古の自然史

- ・ 1,500 万年前：日本列島が大陸から完全に分離
- ・ 1,200 万年前：甲山の誕生
- ・ 100 万年前：六甲山の誕生
- ・ 50 万年前：川西市域まで海になる
- ・ 12 万年前：伊丹海進（伊丹市域まで海になる）
- ・ 2 万年前：寒冷化による海退で大阪湾が陸地になり、古大阪川が流れる
- ・ 6,000 年前：縄文海進（尼崎市域が海になる）

## 2. 阪神間の地層

- ・ 礫(れき)層・砂礫層：陸地（河川）で形成 ↔ 粘土層：海や湖で形成
- ・ 尼崎砂礫層 - 尼崎粘土層 - 伊丹礫層 - 伊丹粘土層 - 川西礫層 - 川西粘土層  
(地表に近い順。伊丹市域では伊丹礫層から始まる。川西市域も同様。)

## 3. 気候と気象

- 阪神間の気候 - 瀬戸内気候区：年間を通じて温暖・少雨だが、特に冬季が少雨。
- 伊丹の風向（昭和 56～63 年）：夏は南東の風がやや多いが、風向による差は少ない。  
冬は北東と北の風が特に多く、南西と南の風は非常に少ない。

## 4. 様々な土壌

- 山地、丘陵地の土壌：風化した岩と火山灰、落葉などから形成
  - ・ 褐色森林土：落葉広葉樹林帯に発達する。性質は変化に富んでいる。
  - ・ 黒ボク土：主に火山灰由来の土壌。腐食が多く柔らかい。
  - ・ 赤黄色土：腐食が少なく硬い土壌で酸性。酸化鉄により赤黄色を呈する。
- 低地の土壌：他の場所から流れてきたものが堆積
  - ・ 褐色低地土：地下水位低。畑地が多い。
  - ・ 灰色低地土：地下水位中。水田の代表的土壌。
  - ・ グライ化土：地下水位高。鉄分の還元した二価鉄による青灰色のグライ層が発達。
- 未熟な土壌：土壌の層が十分に発達していないもの
  - ・ 真砂土（マサド、マサツチ）：花崗岩が風化してできた粒径の粗い土。
- 阪神間の土壌の特徴
  - ・ 六甲山地には真砂土が分布。花崗岩は全国に広く分布しているが真砂土は少ない。
  - ・ 山地、丘陵地には赤黄色土が多い。

## 5. 植生分布

- (1) 針葉樹林：エゾマツ、トドマツなど - 北海道
- (2) 夏緑樹林（落葉広葉樹林）：ブナ、ナラなど - 東北日本、北海道
- (3) 照葉樹林（常緑広葉樹林）：シイ、カシ、タブなど - 西南日本（阪神間含む）

## III. 阪神間の歴史と文化

## 1. 阪神間の先史・古代

- ・ 2 万年前 : 川西市加茂、芦屋市朝日ヶ丘・打出で旧石器時代のナイフ形石器
- ・ 縄文時代晩期 : 口酒井で畿内最古の靱圧痕付き浅鉢
- ・ 弥生時代前後 : 川西市西畦野（うねの）下ノ段・井戸遺跡 - 山間地の大規模集落跡  
大和盆地から日本海側への交通の要衝 ?
- ・ 3 世紀 : 赤烏七年銘神獸鏡（宝塚安倉高塚古墳）、三角縁神獸鏡（尼崎水堂古墳）

## 2. 山本郷の園芸

○行基年譜（1175 年）泉高父（いずみのこうふ） 「天平十三年（741 年）記」

- ・ 崑陽上池・同下池・崑陽上池溝・同下池溝 — 河辺郡山本里に有り

○山本郷四至（しいし）図（1357 年）：東限稲川 西限崑陽 南限有岡 北限宇保

○源氏武士団の創設と園芸の発展

- ・ 源満仲（みなもとのみつなか）912～997 年：源氏武士団の祖。多田を本拠地とした。  
江戸幕府で甘藷栽培を推進した青木崑陽の祖先は多田院の神職との伝承あり。
- ・ 坂上頼次（さかのうえのよりつぐ）：初代山本荘司（しょうじ：荘園の管理者）  
坂上田村麻呂の子孫。源満仲が山城国（京都）から御家人として招いた。  
河辺郡には、それ以前から坂上氏が勢力を持っていたとの伝承あり。
- ・ 坂上季猛（さかのうえのすえたけ）：第三代山本荘司  
坂上田村麻呂を祀る松尾丸社を創建。源頼光（満仲の長子）の四天王（渡辺綱、碓井貞光、卜部季武、坂田金時）の卜部季武と同一人物との伝承あり。
- ・ 坂上頼継（さかのうえのよりつぐ）：第四代山本荘司  
11 世紀、山本脊山中腹の居館前に牡丹園を造り、日本園芸の始まりとされる。  
※ 「藝」の元の意味は、「技能」ではなく、「草木を手で土に植えること」  
→ 「上達し、伝える技能」の意味で使われるようになった。芸術、芸能など
- ・ 坂上頼定（さかのうえのよりさだ）：第十二代山本荘司  
13 世紀、水石（すいせき：泉水・庭石）の術（造園技術）に優れる。
- ・ 坂上頼泰（さかのうえのよりやす）：第三十四代山本荘司（最後の山本荘司）  
16 世紀、接木の技術を開発し、豊臣秀吉から「木接太夫」の称号を受ける。
- ・ 昭和初期：日本三大植木産地の一つとされた。  
他は埼玉県川口市安行（あんぎょう）、福岡県久留米市田主丸（たぬしまる）

### 3. 阪神間の近代化と「阪神間モダニズム」

#### ○鉄道の開通

- ・ 明治7年(1874) 官営鉄道(現JR)が大阪-神戸間に開通
- ・ 明治38年(1905) 阪神電気鉄道が大阪-神戸間に開通
- ・ 明治43年(1910) 箕面有馬電気軌道(阪急)が大阪-宝塚、石橋-箕面間に開通
- ・ 大正9年(1920) 阪神急行電鉄(1918年改称)が大阪-神戸間、塚口-伊丹間に開通

#### ○住宅地の開発(阿部元太郎 あべげんたろう:個人開発者、後に日本住宅株式会社社長)

- ・ 明治38年(1905)～ 住吉村観音林(かんのんばやし)・反高林(たんだかばやし)
- ・ 大正4年(1915)～ 雲雀丘(宝塚市)
- ・ 昭和3年(1928)～ 松風山荘(芦屋市) - 六麓荘が開発されたのも1928年から

#### ○施設の設置

- ・ 明治44年(1911) 住吉村反高林に甲南幼稚園が創設(阿部元太郎が主導)
- ・ 大正13年(1924) 甲子園球場が完成、宝塚大劇場が開場  
ルナパーク(昭和35年から宝塚ファミリーランド)が開園
- ・ 大正15年(1926) 宝塚ホテルが開業

#### ○鉄道会社の出版物

- ・ 明治41年(1908) 「市外居住のすゝめ」発行(阪神電鉄)  
大阪の環境悪化を背景に、郊外居住が健康に良いことを多くの医療関係者が記述。
- ・ 明治42年(1909) パンフ「住宅地御案内」発行(箕面有馬電気軌道:現阪急)  
「煙の都」大阪市民に、郊外居住を勧める。(池田新市街:日本最初の分譲住宅地)
- ・ 大正2年(1913) 月刊誌「山容水態」創刊(箕面有馬電気軌道)  
住宅地の様子や生活環境を紹介。郊外生活のイメージを伝える。
- ・ 大正3年(1914) 月刊誌「郊外生活」創刊(阪神電鉄)  
郊外生活の魅力を紹介。園芸を中心とし、史跡や文学などの記事があった。

#### ○「モダニズム」と「阪神間モダニズム」

- ・ モダニズム(近代主義):伝統や権威からの脱却を基調とする芸術・文化の潮流。日本のモダニズムでは西洋文化を積極的に取り入れたが、欧米のモダニズムには、逆に日本の伝統文化が影響を与えている。
- ・ 阪神間モダニズム:20世紀前半、阪神間の住宅街を中心に展開された西洋風の生活文化で、命名者の河内厚郎氏は「日本の伝統文化を近代に甦らせる意識」を重視している。

○「阪神間モダニズム」の近代建築

- ・ スパニッシュ・ミッション・スタイル：修道院に由来する建築様式で、スペイン風赤瓦（半円筒形、素焼時の赤色は酸化鉄に由来）と、クリーム色の外壁が特色。
- ・ 関西学院大学（1929年） 国登録有形文化財 甲山を背景にした景観
- ・ 神戸女学院大学（1933年） 重要文化財 里山の四季との調和

○「阪神間モダニズム」と植木・園芸

- ・ モダニズムにおいては造形美を迫する「平面幾何学式庭園（フランス式庭園）」に対して、自然景観を取り入れ、四季の変化を楽しむ「自然風景式庭園（イギリス式庭園）」が提唱された。→ 1990年代日本の「イングリッシュガーデン」ブームへの流れ
- ・ ①「園芸を楽しむ健康的な生活」の提案、②「モダニズム」における自然風景式庭園の潮流、③「伝統を近代に生かす」精神 → 建築・生活と自然・植物との調和美を求めるスタイル（自然や庭などの緑と美しく調和する建築など）
- ・ 景観の一部となった植木・園芸は、「個人の財産」から「まちの財産」へと発展する。

#### IV. 魅力ある植物たち

##### 1. 桜

○園芸種の桜

- (1) ソメイヨシノ：江戸時代末期に染井村（現東京都）で開発された観賞用桜の代表種
  - ・ 花が葉より先に開き、クローン（複製）であるため、地域ごとに一斉に開花する。
- (2) 八重桜：おしべが花びらになり、多くの花びらを持つ桜
  - ・ 大半がオオシマザクラ系であり、鎌倉時代に鎌倉周辺で開発されたと考えられる。
  - ・ 徒然草（吉田兼好）1331年ごろ「花はひとへなる、よし。八重桜は奈良の都にのみありけるを、この比（ごろ）ぞ、世に多く成り侍るなる。」
- (3) しだれ桜（糸桜）：植物ホルモンのジベレリンが十分に機能せず、枝がしだれる桜
  - ・ 柿園詠草（加納諸平 かとうもとひら）1854年「昆陽寺の前に糸桜の大木あり」

○野生種の桜

- (1) ヤマザクラ：阪神間の山に広く分布
  - ・ 花の時期はソメイヨシノとほぼ同じだが、一斉に開花しない。花が葉と同時に開く。成木では葉の裏に光沢がなくて白っぽくなる。

(2) カスミザクラ：阪神間では最明寺川流域などに分布

- ・ ヤマザクラより遅咲きで、4月下旬に開花する。葉の裏には光沢があり緑色。

(3) エドヒガン：阪神間では川西、能勢などに分布

- ・ ヤマザクラと同時かやや早咲きで、花が葉より先に開く。花の根元が丸く膨らむ。  
他の桜と異なり、成木では皮目（ひもく：樹皮の横線）が見られない。

## 2. つつじ

○園芸種のつつじ：日本で最も多く植えられている植木

(1) ヒラドツツジ：古くから長崎県平戸で栽培。庭や公園、生け垣などに広く植栽。

- ・ 開花は4月下旬～5月中旬。花は大きく色は赤紫、白、桃など多彩。

(2) キリシマツツジ：鹿児島県霧島山の自生種から江戸時代に作出。

- ・ 開花は4月下旬～5月初め。花の色は朱色 - 紅色と赤紫が多い。

(3) サツキ：野生のサツキから作出。生け垣や道路の植込みなどに広く植栽。

- ・ 開花は5月～6月中旬。花の色は朱色と赤紫が多い。小さい葉が特徴。
- ・ 開花が主に旧暦の5月（太陽暦の6月ごろ）であるため五月（サツキ）と呼ばれる。

○野生種のつつじ：酸性土壌を好むため、花崗岩が風化した場所に多い。

(1) コバノミツバツツジ：阪神間の山に広く分布

- ・ 開花は3月～4月。花の色は淡紅紫色。3枚の葉が枝先につく。

(2) モチツツジ：阪神間の山に広く分布

- ・ 開花は4月～6月。花の色はコバノミツバツツジより薄い淡紅紫色。

(3) ヤマツツジ：阪神間の山に広く分布

- ・ 開花は4月～6月。花の色は朱色。

(4) 野生のサツキ：阪神間では武庫川溪谷に分布（絶滅危惧種）

- ・ 開花は5月～6月中旬。花の色は朱色。
- ・ 溪流の過酷な環境（水没や乾燥など）に対応して葉が小さくなったとされる。

## 3. タンポポ

○花びらのようなもの1つ1つが花。総苞外片が反り返っていないのが在来種。

(1) カンサイタンポポ：市内では天神川・天王寺川や瑞ヶ池公園などに分布

- ・ 2倍体（※）。昆虫がほかの株から花粉を運ぶことによって実ができる。

※ 体細胞に2セットのゲノム（体の設計に必要な最低限の遺伝子）を持つ生物

(2) セイヨウタンポポ：市内全域に分布

- ・ ヨーロッパ原産の要注意外来生物。主に 3 倍体で、クローンで増殖する。

(3) シロバナタンポポ：市内では神津大橋から JR 伊丹駅付近などに分布

- ・ 主に 5 倍体で、クローンで増殖する。カンサイタンポポより大型化する。

#### 4. ウリ科植物（野生種）

(1) アレチウリ：市内では武庫川・猪名川の河川敷などに分布。果実は緑色でとげ。

- ・ 北アメリカ原産。特定外来生物であり、栽培や運搬は原則禁止。

(2) カラスウリ：市内では猪名川付近や伊丹緑地などに分布。果実は朱色。

- ・ 葉の表面は短い毛に覆われる。種子は結び文に似ており「たまずさ」と呼ばれる。
- ・ 花は日没後に咲き、花の筒の長さが 6cm もあるので、スズメガだけが吸蜜できる。  
(花粉を運ぶ相手を限定することにより、効率よく雌花に届けるため)

(3) キカラスウリ：市内では猪名川付近や JR 伊丹駅付近などに分布。果実は黄色。

- ・ 葉の表面は光沢がある。種子の形はスイカの種に似ている。
- ・ 塊根は漢方薬に使われる他、天花粉（ベビーパウダー）の原料にもなった。

(4) スズメウリ：市内では未確認。猪名川の川西市域に分布。果実は白色。

- ・ 秋には、つるの先が地面にもぐり肥大化するとともに、塊根をつくる。

(5) ゴキヅル：市内では藻川起点付近に分布。水辺に生える。果実は緑色。

- ・ 名前は合器蔓から来ており、果実のふたが取れ、種子が水面に落ちて運ばれる。

## V. 古絵図に秘められた謎

1. 猪名の笹原：有名な歌枕。伊丹台地あたりに存在したと考えられる。

- ・ 百人一首「有馬山 猪名のささ原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする」

大弐三位（だいにのさんみ）：平安時代の歌人。紫式部の娘。

- ・ プラントオパール（植物ケイ酸体）：イネ科植物などに含まれるガラス質。

市内 3 カ所（中野、御願塚、鴻池）の土壌サンプル（深さ 0.4～1.5m）を分析すると、いずれもネザサ類のプラントオパールが多く検出された。また御願塚ではさらに下の地層から、稲の籾殻（もみがら）の破片を発見。（2016 年）

→ 伊丹で稲が栽培されるようになった後に、広範囲にネザサ草原が存在？

## 2. 豊桜さき — 猪名野神社の古名（豊櫻崎宮）

### ○ 寛政八年（1796年）伊丹細見図（伊丹市立博物館所蔵）

- ・ 伊丹近辺より池田・昆陽・小浜・中山・有馬辺まで すへて猪名野といへり、猪名山・いな川・猪の原・いなの笠（笹）はらともいへり、歌に  
ありま山 峰の嵐ニ 月さへて 猪名の川原ニ 千鳥鳴なり  
我宿に 千もと桜 花さかハ 植置人の すへ栄なん  
此御歌ハ祇園神詠なり（祇園の神様、牛頭天王の詠まれた歌である）  
是ヲ以て豊桜さきといふ、  
又橘の御菌の庄ともいへり

### ○ 摂津名所図会（1798年）

- ・ 野宮牛頭天王（のゝみやごづてんわう）：伊丹天王町（てんわうまち）にあり。  
古（いにしへ）豊櫻崎宮（とよさくらさきのみや）と稱（しょう）す。  
→ 現在の猪名野神社付近に桜の名所が存在？

### ○ 「とよさき」の名称

- ・ 難波長柄豊碓宮（なにわのながらのとよさきのみや） - 652～686年
- ・ 豊崎県（とよさきけん）：明治2年（1869年）大阪と兵庫の間に存在した県。

## 3. 橘御菌

### ○ 左近桜・右近橘

- ・ 京都御所の紫宸殿（ししんでん）に「左近桜（さこんのさくら）」と「右近橘（うこんのたちばな）」があることから、桜と橘がひな飾りの左右に置かれる。
- ・ 坂上田村麻呂の弟、坂上鷹養（たかかい）の孫、坂上瀧守（たきもり）が、貞観年間（859～877年）に枯れた宮中の左近桜を根から生じた芽から復活させた。

### ○ 橘御菌：平安・鎌倉時代の猪名川沿いに広がっていた摂関家の所領。

- ・ 橘御菌は、もとは柑橘類を貢納する果樹園として成立したものとみられている。その範囲は尼崎市から川西市、宝塚市にわたり、市内では北伊丹や北園付近と森本、鋳物師などが含まれていた。
- ・ 延喜式（927年）では摂津国の産物に橘皮（きつ皮）が挙げられているが、橘御菌で実際に柑橘類が栽培されていたという証拠は見つかっていない。
- ・ 鎌倉時代以降、伊丹氏が橘御菌を管理し、台頭する基礎になった。  
→ 橘御菌が伊丹のルーツ？